

みづゑの續刊に就て

「みづゑ」の續刊に就いて、少し申し述べたいことがある。今は早や昔の繰言となるが、去年の秋開けて菊の花亂るゝ十月に、本誌を創刊せられ、且其主宰者として絶へざる努力を續けられて居た大下先生は、突然とも本當の突然に逝き給ふた。「みづゑ」は眞に先生が愛兒であつた。先生は「みづゑ」の生命で大黒柱であつた。其大黒柱をば意外にも又突然にも失ふたる「みづゑ」は、同時に、大變動を受けなければならなかつた。

否、變動所ではない。本紙の存廢生死に關する問題であつた。一時は、大黒柱の無き今日、「みづゑ」の續刊は問題にならぬとの説もあつた。大下先生を生命としたる本誌は、先生の長逝と共に終局を告げねばならぬとの説もあつた。然し同時に、また、先生が短いとは云いながら、充實せる生涯に、夏の暑を凌ぎ、春の足る日を割きまた冬の風に手を凍らせながら、熱血を注ぎ、眞誠を竭して散布薫育せられたる水彩畫趣味の芽生を捨つるに忍びるか、との聲もあつた。又地方の讀者中には、遙々書を飛ばして、吾々を奈何せん、と叫ばれた人も多くあつた。

異説紛々、議論百出で、何れとも決斷のつき兼ねたる吾々は、此熱心なる眞摯なる讀者の聲を耳にすると共に、此野の叫びを馬耳東風とする事が出来なくなつた。吾々とても畫の大好きな連中である。足らぬ乍ら彩管を手にした経験ある身であるから、吾等と同じ境涯にある人に取つて、「みづゑ」が如何ばかり力に

なるか、如何に頼りと、そして、楽しみとになるか、よく了解することを得る。初めてワットマンを怖るゝ買ふた時代から、如何に待遠しく、毎月の三日を指折り數へて俟ちあぐんだか「聯想の糸は覺えず手繰られて、同情は所々に點在するアマチユーア、アーテイストに向ふた。廢刊は問題にならなくなつて來た。

彌々續刊と決すると、第二の問題が直様と表はれて來る。即ち本誌を如何にして、又誰が、編輯し刊行して行くか、——是が仲々の難問題であつた。

最初は、諸君御承知の、そして春鳥會と混同せられて一方ならぬ迷惑を双方に蒙つたる春鳥堂の主人北山清太郎氏が、親切にも引受けると云ふてくれた。非常に勤勉に活動してくれて、吾々は今も尙其盡瘁に感謝して居るが、不幸にも、同氏は、己が理想と、「みづゑ」の理想と一致せぬ所よりして、僅か三四ヶ月にて辭せられた。北山氏は、其理想を實現せられる爲め、現今は、或協會とかを對立せられて、雜誌を發行せられて居る事と聞き及んだ。同誌の發展は、吾人も同様に、切に希望する所である。

偕て、北山氏を失ふた「みづゑ」は一時途方に暮れたが、幸ひ、大下先生の親友であつた、山岳家の小島烏水氏が、御同情から一時引受けてやつて下さる事となつたから、別に特別の苦境にも陥る事無くして、今に及んだのである。

所が烏水氏とても、繪畫には特別の因縁もない人であり、又

非常に多忙な方であるから、永く御頼みする事が出来る筈が無い。如何はせんと思ひ惑んで居た所、今般、至極適當な人を得たのであつて、吾々は之を諸君に告ぐるを欣ぶのである。

打開けて云へば、編輯は大體大下家の方々も熟練せられて来たから、其所でやる事にして、重なる點に就ては、矢代幸雄氏に、相談と助力とを御依頼することが出来る様になつたのである。矢代氏は、帝大文科の人にて、畫には一方ならぬ趣味を持って居られる事は、諸君も御承知の事であらふ。二三の外國語の素養も充分あられるから、歐米思潮の新しい傾向にも觸れて居られるし、又一方、自ら畫筆を執つて居られるから、畫家の苦心を了解し、岡目八目流の美術批評家の知り得ぬ畫家に對する同情を有つて居られる。本誌編輯顧問としては、誠に、もつて來いの人であらふ。

次に、「みづる」の繪畫の事に就いては、赤城泰舒氏に御頼みする事になつた。同氏の人物や、又畫才に就いては、今更喋々する迄も無からふ。展覽會の批評も出やう。時には講話も出やう。又、幽邃閑雅の地に、自然の美に同化しつゝ、麗しき筆を揮ふ時の思想も出やう。是等は眞に諸君を唸らせる事に相違あるまい。又春鳥會員の月々の繪畫批評も、赤城氏に同じく依頼したから、此點こそ特に諸君は申し分が無いであらふと思はれる。匿名を幸いに飛でもない奴が、飛んでもない批評がましき事もなすが、普通である今日、吾々が、此所に赤城氏が此務めに當つてくれる事を告げるは、非常に嬉しき次第である。本誌

發展とか何とかに取つて便利と云ふのではない。熱心なる諸君に満足と與へられる事が喜ばしいのである。

其他知名の畫伯達が、其所屬團體の如何に關らず、本誌の賛助員となつて下され、時々御話や、原稿を賜はれる等は此所に態々廣告がましく費すまい。元來、世間の甚大なる同情の下に立つ「みづる」である。主腦になつて、統一してくれる人さへ得れば機械は圓滑に運轉して行くのである。

回顧すれば、昨年十一月號以來の困難は非常なものであつた。過渡時代——如何に苦しき經過であつたらう、舊柱石、忽ちに枉屈して、新生命未だ起らず、主腦を缺いた存在は、冗漫散逸に流れざるを得ない。残念ながら、吾々すらも十二月號、一月號、二月號の不整頓不統一を認めざるわけには行かなかつた。斯る遺憾の思ひが胸に起ると共に、其缺點を忍んで以前と變らず愛讀を續けてくれた諸彦の、深厚なる同情を沁みじみ感謝する。而して、其感謝の念が強い丈、夫れ丈、今日の希望ある告白をなし得るに到つたことを欣ぶのである。今や、其の過渡時代を經過して、諸事其緒に就き初めた。大木は秋の嵐に思ひがけなく倒れて、皆は迷つた。人の辛らさ、氷の冷たさを啣つた冬籠も僅かに終りを告げた。陽春の熙々たる光りと共に新生命は湧いて來た。新たなる柱が、敢て、昔程太いとは云はない。されど、新しいのである、若いのである、奮勵と努力との未來を控へたる希望あるものである。諸君の御厚誼に應へ得る日も遠くはあるまいと庶幾する。

諸君よ。以上に述べて来た由來は、所謂本誌の内幕とか、黒幕とか、申すものであらふ。カーライルの皮肉ではないが、世の中は着飾つた衣裳で保つて行くものである。看板を立派にして人を誘ひ寄せて醜き裏面は、暗黒に葬つてしまふが常である。吾々とても其を滿更知らぬではない、然るに、此所に敢て内幕を發表したのは、少しく意味と趣意とがあるからである。

云ふまでも無い事かは知らぬけれども、「みづゑ」によりて結び付けられたる團體は、同一の主義と、理想との下に、大下先生なる人格によつて、統一せられたる無形の集合體であつて、「みづゑ」は、實に、此團體相互の思想交換の手段、相扶け合ひ相指導する機關であつたのである。健全なる趣味布及、高尚なる感情の涵養——之れを、理想として、其修養の方法としては畫筆を握り、深玄幽美なる自然の美を、畫布の上に唱へながら、其美に同化する事を主張したのであつた。同一旗幟の下に集つた吾等は、所謂志を同じくする者である。同志の者の間に互に流れ、同志者を包括する糸は、廣い意味に於ける愛である。同情である。他人ならぬ心地である。斯る温き感情に包まれ、斯る同じき理想を抱く間柄を結び付ける本誌「みづゑ」は、單に賣物、買物として見度くない。廣告を粧ふ廿世紀の世の中に、吾々が敢て、内幕を打開けたのは、諸君等を顧客の様に見度くないからである。聞かせられる事は皆聞かせて、安心を與へ度かつたからである。斯る使命を有する「みづゑ」が、匿名に隠れて勝手な熱を吹く普通の雑誌と選を異にして、未だ所謂大家で

はないけれども、責任を重ずる着實の士が、眞面目な研究と自信との上に立つて居る事を發表して、堅き團結の基礎たる相互の信頼を、より以上に固め度いからである。

「みづゑ」の刊行は、全然、諸君の爲めのみであると云ふ程、我々は偽善者ではない。現に利益は、いくらもある。其利益は、實の所、全部、突然大黒柱を失ひて、母子只二人となられた、寂しい大下家へ行つて居るのである。之れは、情あり、涙ある諸君は、必ず了とせらるゝ所であらふ。されど、之れは要するに、附隨的結果に過ぎないので、「みづゑ」本來の目的は、何處までも、上に詳説した所に在る、あの理想を追ひ、あの旗幟を押立て、今後共何處までも行き度い。

眞摯なる趣味教育——是が本誌の旗幟である。着實、眞面目——それが本誌の甲冑である。友愛的感情——之れが吾々の連鎖である。此幟を翻し、此鎧に身を固め、此鎖に相結付いて、飽くまでも進み度い。吾々が、細部に求る態度は、悉く此三源泉から流れ出るであらふ。新計畫もある。新しき試みもある、但し追々發表する事にしやう。

まだ浦若の經營者は、勿論諸君に比して一日の長あり等とは思つて居ない。比較的便宜の位置に立たれて居るから、御頼みしたのであつた。其人達と雖も、相當の考へもあり、又經營を執掌する以上、無暗に人の云ひなりになる程、腑甲斐なき浮草心ではない。けれども、父死して、後に残つた、云はゞ、兄弟姉妹の様な友愛的團體の機關、「みづゑ」を受持つた經營者、—

―彼等も、元來此團體の古い員であるのであるから、云はゞ同格なる、團體員の親切なる忠告や、諫言や、注意や、は喜んで容るゝてあらう。至誠と云ふ外、經驗のまだ多くない彼等は、参考となる可き事を取入るゝに、決して吝ではない。願はくは、諸君、――皆んなの共有機關である「みづゑ」を、よそならぬ物として、誘導啓發してくれ給へ。本誌の特徴異彩は、常に、此讀者相互間、讀者經營者間の融合一致にある。此特徴を出来る丈發揮し度いと思ふ。

漸くにして、「みづゑ」は、苦しき過渡時代を過ぎて、新生命を得、新時代に向ひ出した。今迄の詮方なき不整頓の御宥しを乞ふと共に、今後の勵精を誓ふ。而して諸君の前に變らぬ御同情と協力とを待つ。

但し新生命に入つたと云ふて、衣服を着更へる様に、變化があると云ふのではない。着實は極端なる急激の變轉を嫌ふ。漸を以て進み度い。こんな事は云ふを俟つまい。

然しながら、着實とは、守株と異なる事を御注意あり度い、溫レ故知レ新――之れは慥に眞理である。然し、故きを温ねるを、唯一に新を知る方法とは主張せぬ。新時代の「みづゑ」は、充分に新しき時代の空氣を呼吸し度い。勿論新しいくとは、徒らに、胡瓜の空花を追ふ愚は學ぶまい。着實に新思潮に觸れ、新傾向を紹介する事は決して怠るまい。此頃、「現代」とか「近代」とか云ふ標識が多くなつて來たが、それは至極結構である。但し、俗に日本で叫んで居る「現代」や「近代」は、餘程、怪しいの

が多い。西の極の歐洲の中心から、東の極の日本まで、響きが傳はるは容易でない。漸く、日本に、かすかに、カインと反響する時分には、歐洲の本場では、他の響きが、新にドーンと鳴り初めて居る。吾々は、翻譯位の葎の髓から傳へられる古臭い「現代」「近代」に満足し度くない。幸ひ、此度の經營者の一人は、外國語に堪能であられるから、新しい「現代」を傳ふる事が出來やう。之を吾人は欣んで告白する。

他に云ひ度い事も澤山有るけれども今は止める。我ながら、冗長な筆、我々が主旨を解して下されば幸いである。

■美人畫展覽會 赤坂三會堂に於いて、本月五日より十月二日

迄一週間、婦人を描ける諸種の繪畫を展覽すべしと

■七寶圖案展覽會 藤井達吉氏の研究になれる全圖案畫を近日

中に展覽に供すべしと

■本誌の賛助員 たる中澤弘光、三宅克巳、岡野榮、小林鐘吉、

の諸氏並びに跡見泰氏、杉浦非水氏の發企になれる覽展會を
本月中竹之台陳列館に於て開催せらるべしと聞く

■敬助青楓畫會 黒内清輝、上田敏、高村光太郎三氏の發起に
なれる柳津田兩氏の作品を頒つ同會は其后中々の盛況なりと